

道徳の時間

各教育活動と調和的につながった道徳の授業づくり

小 早 川 善 伸

1. はじめに

これまで私の道徳の授業の中で、子どもたちと共に本音で語り合い、ねらいにせまるような授業をどれだけできたでしょうか。よく陥ってしまうのが、資料の読み取りに終わってしまうこと、新たに気づいた価値を一般化し、これからの生活での実践意欲としようとした時に授業の流れが切れてしまうことであった。

小学校学習指導要領では、道徳の時間は、「各教育活動における道徳教育の「要」として、それを補充し、進化し、統合する役割を果たし、各教育活動での道徳教育が調和的に生かされ学習が計画的、発展的に行われることが大切である」とされている¹⁾。この調和的なつながりが筆者の道徳の時間にはないと考えた。そこで、各教育活動との調和的なつながりをもった道徳の授業を計画実施し、子どもたちが語り合い、ねらいにせまることのできるような道徳の授業づくりに取り組みたいと考えた。

2. 研究の構想

(1) 体験を生かした総合単元の実施

学校行事や学級活動との関連を図り、それらの体験に深く関係ある道徳の授業を行う。そうすることで、体験→道徳の授業→体験とつながりやすく、道徳の授業が他の教育活動と調和的につながると考える。

今回は体験活動として中学校との合同クラブを活用する。これは、小学校6年生が、中学校の部活動に参加し、共に活動するものである。

学級活動では合同クラブへ向けてのねらいの話し合いや事後の振り返りを行う。

(2) 体験を生かすことができる場面を入れた自作資料を使っての授業

これまでは、既成の資料を用いることが多かった。しかし、今回は体験したことを基にした資料を教師が作成する。自分の体験にとっても似通っていることから、思いを出しやすいくと考える。また、授業前半の読み取りにとっていた時間が、体験を生かした課題を見つめる時間になり、授業後半のこれからの活動に向けた実践意欲を高める部分につながりやすくなると思う。

3. 実践例

(1) 総合単元名

小中合同クラブ

～中学生に学び、6年生力を高めよう～

(2) 授業実施学年

小学校6学年1組の子ども40名(男子20名、女子20名)を対象に実施した。

クラブ分けについては、事前に6年生に参加したいクラブの希望をとり、それを基に教員がどのクラブもほぼ同じ人数になるよう振り分けた。第1回と第2回の合同クラブでは同一のクラブに参加した。

(3) 単元実施時期

平成23年7月～11月

第1回合同クラブ7月12日～14日

第2回合同クラブ11月8・9日

(4) 単元目標

○ 中学生が自分たちのために様々な工夫や努

力をしていることに気付く。

- 中学生のクラブに対する思いを感じ取るとともに学びのある合同クラブにするために、自分たちにできることを考える。
- 中学生の思いを考えながら行動するとともに、小学校のリーダーとして活動するための同学年との人間関係づくりや企画・運営力を学ぶ。

(5) 単元計画 (全4時間)

- 第1次 めあてをもっていざ出発・・・1時間
 小中合同実行委員会・・・(時間外)
 活動のめあてを決めよう・1時間(学活)
 第1回合同クラブ・・・(時間外)
- 第2次 次の合同クラブに向けて・・・2時間
 ともに伸びよう・・・1時間(道徳)
 めあてを練り直そう・・・1時間(学活)
 第2回合同クラブ・・・(時間外)
- 第3次 合同クラブを終えて・・・1時間
 6年生力を高めよう・・・1時間(学活)

(6) 授業の概要

【第1次】

小中合同実行委員会

小学校の自伸会(児童会)の代表(会長, 副会長, 書記, 体育委員長)6名と中学校の自伸会(生徒会)代表(執行部)とが集まり, 合同クラブの事前打ち合わせを行った。内容は目標の決定, 日程の確認, 第1回目の合同クラブの流れの確認であった。主に, 中学生からそれらの内容が提案され, 小学生を入れた全員で確認するというものであった。

活動のめあてを決めよう『学活の時間』

小中合同実行委員会で決まった目標を基に6年生のめあてを決めた。子どもたちが具体的な目標を決める前に, 中学生と小学6年生が共に活動する意味について考えるようにした。そうすることによって, より小学校の最高学年という立場を意識して, めあてを考えることができた。そのめあては,

- a. クラブ活動の進め方について学ぶ
- b. クラブ内での人間関係づくりについて学ぶ

c. 各クラブの魅力を知る

に決まった。それら学んだことを自分たちの小学校生活に生かしていこうと話し合うことができた。

第1回合同クラブ

自分が選んだクラブでそれぞれ中学校のクラブを体験した。最初, 子どもたちはとても緊張しているようであったが, 中学生に話しかけられたり, 技術指導をしてもらったりする中で, 次第に緊張もほぐれていった。



図1 音楽クラブの様子



図2 テニスクラブの様子

クラブ終了後, 6年生でめあてについて振り返った。特にaとbについて次のような感想があった。

a. クラブ活動の進め方について学んだこと

- 最初に, その日の活動をみんなで確認すると, 時間を意識しながらみんなが動くことができる。
- キャプテンがみんなに「集合」と声を出すと, みんな「はい」と返事をして素早く集まっていた。そうすると, チームに一体感が生まれる。
- 吹奏楽部では誰かが指揮台に立つと, それまでどんなに練習でうるさくなくても, 自然に静かになる。みんなで守るルールがあった。

b クラブ内での人間関係づくりについて学んだこと

- 9年生(中学3年生),特にキャプテンは,7年生,8年生全員が活躍できるように全体を見て声かけしていた。
- みんな仲良く,楽しそうに活動していたが,中学生は,先輩に対して丁寧な言葉を使って話していた。

これらの学んだことを,小学校のクラブ活動(4~6年生が参加)やさわやか班掃除(1~6年生を縦割りにしてグループをつくり掃除を行っている)で生かしていこうと話し合うことができた。

一方,課題や次の合同クラブで頑張りたいこととして,次のような感想があった。

- 中学生から言われて行動していたが,自分から考えて行動することができなかった。
- 6年生のめあての内容についてやテニスラケットの持ち方など技術のことで,もっと聞きたいことがあったが,中学生に積極的に聞くことができなかった。

これらについて,どのように解決していくか考えるようにした。そこで教師から,頑張っていた6年生の姿について紹介した。「いつもより大きな返事で行動していた。」「聞きたいことがある人はいますかと中学生から聞かれて,頑張って手を挙げていた。」どれも,日頃の教室での様子と少し違った一面を見せてくれた子どもの姿であった。すると,子どもたちから「6年生同士もう少し協力しよう」という意見が出た。隣にいる6年生のことまで気にする余裕がなかったことに子どもたちは気付いた。6年生同士声を掛け合ったり,勇気をもって行動した友だちをフォローするように続いたりしようと決めた。

【第2次】

ともに伸びよう『道徳の時間』

第1回目のクラブの振り返りで出た課題を生かすと共に,6年生同士固定化されつつある人間関係や互いの固定観念をもう一度見直し,お互いの

特徴や個性伸長のための努力を認め合うことを通して,互いに高めあうより良い人間関係を築こうとする実践意欲を高めることをねらいとして,この時間を設定した。また,資料には子どもたちが実際体験している小中合同クラブに関係した場面を用いることで,子どもたちが自分の課題としてとらえ,考え判断し,行動しようとするができるようにした。

○ 主題名

友だちの特徴を決めつけ否定的にとらえるのではなく,その特徴を認め合い互いに高めあおうとする。2-(3)

○ 題材 佐藤君という人(自作資料)

佐藤君という人

ぼくには佐藤君という友だちがいます。1年生から今の6年生までなんと一緒のクラスです。佐藤君はスポーツ万能です。休み時間には外でサッカーをすると,何本もゴールを決めます。体育のバスケットボールでもドリブルは速いし,シュートも決めます。さらに,イケメンで男のぼくから見てもカッコいい男の子です。

けれども,そんなカッコいい佐藤君は極度の恥ずかしがり屋だったのです。クラスの女の子に話しかけられると顔が真っ赤になります。授業中,手を挙げて発表するところは見たことがありません。先生に指名されただけで顔が真っ赤になり,立つまでに何秒もかかります。

佐藤君自身そのことを気にしているようで,学年始めの目標には「1日一回発表」とかいていましたが・・・。

そんなある日,中学生と6年生とが合同クラブをすることになりました。中学生が放課後毎日行っているクラブに参加させてもらうのです。ぼくと佐藤君はテニスクラブに決まりました。

合同クラブの前日同じクラブの友だちが集まって,今回のめあてを決めました。学年共通のめあては「中学生さんに学んで,これからの小学校生活に生かそう」でした。そして,個人のめあてはぼくは「テニスをうまくなる。」でした。佐藤君は「中学生さんに自分から質問をする。」でした。佐藤君には悪いけど,まあ無理だろうなと思いました。

そして,合同クラブの日。楽しみにしていたクラブが始まりました。中学生さんは1対1でグリップの握り方,足の踏み出し方など丁寧に教えてくれました。佐藤君とぼくはどんどんうまくなりました。特に,佐藤君は速いボールも相手コートにどんどん打ち返していました。(やっぱりいけるなあ。)と思いました。

最後にみんな集合して反省会をしました。中学9年生のキャプテンから

「小学生さんから聞いてみたいことや質問はありませんか。」

と聞かれました。ぼくは,(そんな質問でいって

も、聞いてみたいことはあるけど、中学生さん、しかも9年生には無理だよ。)とっていました。その時なんと、佐藤君の手がゆっくり拳がったのです。まさかと思ったのですが現実でした。そして、すでに顔は真っ赤でした。キャプテンに指名された佐藤君は話し出しました。

「えーっと、その、どどどどうして……」
そこから佐藤君は何も言うことができませんでした。少し長い時間がたった時、キャプテンはにっこりしながら

「手を挙げてくれたことがうれしい。内容がまとまったら伝えに来てね。手紙でもいいよ。」と言ってくれました。「それじゃこれで合同クラブはおしまい。ありがとうございます。」

小学校への帰り道、佐藤君は肩を落としていましたが、その後ろ姿は少し大きく見えました。

○ 本時の目標

佐藤君に対するぼくの気持ちの変化について考えることを通して、友だちと自分との特徴を認め合い、お互いに高めあおうとする。

○ 指導過程

中心場面では、次のように子どもたちは考えを深めることができた。

T：佐藤くんの行動を見て、僕はどのような気持ちだったろうか。

S：佐藤くんは目標にはしていたけど、本当に手を挙げるとは思わなかったの、びっくりした。

S：頑張れ。最後まで頑張って言ってほしい。

T：僕の佐藤くんに対する気持ちは最初と今とはどのように変わったか。

S：今までのことから、無理だと決めつけていたけど、今は応援する気持ちに変わった。

S：つけ加えて、今は佐藤くんのことを見直している。

S：佐藤くんが少し、遠い存在になってしまったような気持ちになったと思う。なぜなら、佐藤くんは自分の課題に向かって頑張っているのに、自分はあまり成長していないから。

T：それじゃ、このあと二人は離れていってしまうのかな。

S：佐藤くんには負けてはいられないと思って僕も頑張るって、いいライバルになると思

う。

S：ぼくが佐藤くん「頑張ってたね。」と声をかけて、さらに仲が深まったと思う。

特に、下線部では佐藤君の頑張りに対して、主人公の「ぼく」の気持ちについて考え、「ぼく」も佐藤君のように前向きに生きるとともに、一緒に伸びていこうとする気持ちに迫ることができた。

その後、「なぜ佐藤くんは教室でできなかったのに、より難しそうな合同クラブでチャレンジすることができたのだろうか」について考え、最後に教師の経験を話した。いつも過ごす集団の中では、もう一歩が踏み出せないが、いつもと違う場所では、自分の課題を克服しようとする気持ちが湧いてくるという内容だった。そして、そういった仲間を認めていく6年生の集団でありたいと締めくくった。

授業後の振り返りでは、

○ わたしはあまり発表するほうではないので、そこをもっと頑張りたい。

○ 小学校のクラブでは6年生だけど、あまり司会をしていない。苦手だからと思っていたけど、次からは少しずつチャレンジしたい。

○ 友だちのことを決めつけず、頑張っていることをもっとしっかり見てみたい。

○ 次の合同クラブでは、友だちの新しいがんばりや個性を見つけたい。

というように、自分の課題を克服しようとしたり、そういった友だちを改めて見つめ直し、お互いの良さを伸ばしていこうとしたりする気持ちをもつことができた。



図3 授業の様子①

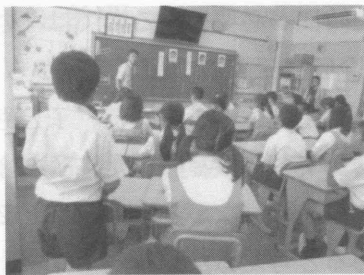


図4 授業の様子②

めあてを練り直そう『学活の時間』

第2回目の合同クラブの直前、学級活動の時間にもう一度ねらいの確認をした。授業の最初には前回道徳の時間の子どもの振り返りを紹介し、お互いの新たな一面を見つめることを意識づけた。第1回目の合同クラブの課題と道徳の学習から、前述の a, b, c に付け加える意見がでた。

6年生どうし協力し、自分の課題にチャレンジして、認め合おう。

という4つ目のねらいが加わった。最後に次回クラブでの自分の目標を書いた。

- 1回目の時は、反省を言う時に手を挙げるができなかったので、今度は手を挙げて自分の意見を言う。
- 自分から質問して、積極的にかかわる。
- 自分から中学生に質問したり、意見を言ったりして、日頃できてないことをがんばる。
- 中学生に言われて動くのではなく、自分で考えて動きたいし、そうやってがんばっているほかの6年生をフォローする。

特に1つ目と2つ目の目標が多かった。この中には、日常の生活ではあまり自分の考えを主張することが少ない子どもの目標もあり、合同クラブをチャンスに自分自身を成長させようと意欲を高めているようであった。また、そういった仲間を互いに支え合おうとする意識も生まれてきているようであった。

第2回合同クラブ

2回目の合同クラブでは、1回目の経験もあることから、緊張することもなくスムーズに始まった。1回目の内容からさらに高度な内容を練習す

る場面もあった。中学生との距離も近くなり、お互いの笑顔も増えているようであった。

【第3次】

6年生力を高めよう『学活の時間』

2回目の合同クラブ後、1回目の合同クラブから自分たちが考えてきたこと、成長したこと、これからの課題について話し合った。その中で、6年生どうしの頑張りを見つけた人の意見も出された。日頃授業中などはあまり手を挙げることはないが、クラブの時に、自分から中学生に質問したり、反省を言う時に手を挙げ、自分の意見を言ったりすることができた子どもがいたというのである。道徳の授業の一場面を見ているようであった。頑張っって一步を踏み出してくれたこともであるが、なによりその頑張りを受けとめ、みんなで認め合うことができたことが何よりうれしかった。子どもたちのふりかえりには、次のような記述があった。

私はとっても緊張していました。なぜかというと、最後のクラブだから「自分から中学生に話しかけてみよう」と思ったからです。

そしてクラブの時、私は初めて話しかけることができました。そしたら、中学生さんは優しく答えてくれたり、アドバイスをもらえたりしました。

とってもとっても嬉しかったです。

今回は学年の友だちの良いところも見つけるという目標もあった。普段あまりしゃべらない人が、中学生さんと楽しそうに会話していたり、普段よくしゃべる人が真剣に取り組んでいたりと。何か新しい一步を踏み出しているような感じがして、私もがんばらなくてと思った。

1回目のクラブの時はほとんどいかなかったが、今回の振り返りでは、6年生どうしの頑張りを見ている子どもが多くなった。

これからの学校生活で、中学生から学んだことを生かし、6年生同士協力して学校を引っ張って

いこうと気持ちを新たにして学級の話し合いを終えることができた。

4. 考察

(1) 体験を生かした総合単元の実施について

今回、体験→道徳の授業→体験と単元を構成したことによって、体験したことを基にそこから子どもたちの課題を浮き彫りにし、道徳の授業で新しい価値について考え、それを実践する場があった。道徳の授業では自分たちが体験したことに近い場面に入り込んで、主体的に考えていた。その後の体験活動（第2回クラブ活動や学級での話し合い活動）では道徳の時間を受けて、子どもたちには実践のチャンスであり、教師にとっては行動化を見とる場面があった。これは、この単元での子どもたちの成長を評価することができ、次の単元計画への課題とすることもできる。

(2) 体験を生かすことができる場面を入れた自作資料を使つての授業について

今回の授業で、資料を読み取るころから、子どもたちは自分のこととして主体的に考え、語っていた。授業の後半も、資料の内容がこれからの生活や体験に関連していることであつたので自然と「次の合同クラブでは」や「6年生として」と考えることができた。

5. おわりに

今回の実践を通して、体験活動との関連を図り、総合単元的に道徳の授業を構成すること、その道徳の授業では、子どもたちが体験したことから課題を見出し、その一場面について考えていくことで、本研究の課題である各教育活動と調和的につながった道徳の授業を展開することができた。そして、それが子どもたちの実践意欲と行動化を育て養うことに有効であると感じられた。

しかし、単元内での道徳の時間数、単元実施期間の長さについては課題が残る。補充・深化・統合する役割を考えると一つの単元に少なくとも3

時間は道徳の時間が必要になるのではないかと考えた。また、今回単元実施期間が7月から11月と長期になると共に夏休みを挟んだ。子どもたちの意識も少し薄れがちになっていた。子どもたちの意識の持続や単元の間隔を考えると2～3か月が適当であると考えた。

<引用・参考文献>

- 1) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 道徳編」，2008，東洋館出版社。
- 2) 広島大学附属三原学校園：「幼小中一貫で育てる『かかわり力』」，2010，溪水社。
- 3) 広島大学附属三原小学校教育研究会：「子どもが生きる道徳の時間」，1989，広島大学附属三原小学校教育研究会。
- 4) 福山市立旭丘小学校道徳研究会紀要：「体験から学び、生活に生かす子ども～総合単元的な学習を通して～」，2007，福山市立旭丘小学校。